

親鸞における疑訪について

川添泰信

親鸞の依用した疑に関わる語句は様々であり、数多くみることが出来る。例えば、疑愛・疑蓋・疑悔・疑難・疑謗・疑惑・疑怯退心、等々であるが、これらの使用例からも、凡その疑の意味・性質は推測できるようである。しかし、基本的には、一心について、「ふたごころなく、うたがいなし」と並記して述べられるように、疑とは、あれか、これかという二路性を持つ心的様相であるということが出来る。この疑については『大経』胎化段に、疑の対象として仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智の五智をあげている。これについて、曇鸞の『略論安樂浄土義』では、仏智は所疑の總名であり、他の四智は所疑を対治するものとして示され、疑に四意あるとしてそれを仏智以外に対応させて明らかにするのである。この疑の内容は、仏の存在や作用に対するものであり、又、自己の存在に対する疑いであり、それは極めて理性的、論理的な疑意であるということが出来る。このことを親鸞に即して疑の対象となるものをあげてみると、

仏智（不思議）・浄土・証大涅槃・往生極樂・誓願（不思議）・願力・往生の信心・名号を称すること、等を例挙することができる。このことから、疑の対象は教義全体に亘つていわれると考えられるのであるが、親鸞の疑は『略論』の仏智に対するものから、自己の信心に対する疑いまでを含んでいわれるものであると推測される。親鸞は、『唯信鈔文意』に、「選択不思議の本願の尊号、無上智慧の信心をききて、一念もうたがふころなければ、眞実信心」と述べている。即ち、選択不思議の本願の尊号、無上智慧の信心を疑わなければ、我々の眞実信心となることを明している。このことを逆説すれば、本願・信心を疑うということは、仏智より自己の信心までを含めて疑うということであり、具体的には信心は二種深信として示されるわけであるから、一つは往生に障碍あるものとして自己の罪悪性を把握し、それ故、善本を修習しようとするものである。そして今一つは、仏の働きに対して疑いを持つが故に、弥陀の摂と不摂とに対して論じ、

二路性を持つことである。このように疑を持つという心的様相は自己の罪を恐れ、それが往生に対して障碍あるものとして把握するから弥陀の摂取に対してふたごころを抱き撰不撰を論するのである。このことが、親鸞の示した疑の心的様相であると考えられる。又、疑は疑蓋とも熟語されている。この疑蓋は、三心釈に疑蓋無雜としてたびたび反復使用されている。この点からみるならば、親鸞は特にこの疑蓋について注目していたとみることができ、この疑蓋の意味については、先哲が、「剋論すれば自力心」と示し、又、猶予、不決定、障り、覆蔽等の性質を持つものとして明している。この中、自力心ということについては「正像末和讃」(誠疑讚)に、「信心のひとにおとらじと 疑心自力の行者も 如来大悲の恩をしり 称名念仏はげむべし」とか「一念多念文意」に「不定聚の自力の念仏 疑惑の念仏の人は報土になしといふなり」と明されることから、疑は自力の異名であるとみることができ、そして更に、親鸞の使用例から、疑は煩惱・無明と同義として扱えられていないことから、疑は自力心として特別な位置づけがなされていたものと見ることができ、では更に、今一つの疑の覆い・障りという性質はどのような意味であろうか。この疑蓋の類語としては、他に疑網・疑城・胎宮・華胎等を想起することができるが、これらの語句の背景に、『大経』胎化段のあることは容易に考えること

ができる。とするならば、その化土の説相の中に疑蓋の性質が示されているとみることができ、即ち、それは、疑り者は、宮段に生まれて五百歳の間仏をみることなく、経法を聞くことなく、更には、菩薩・聖衆等をもみることができないと示され、その故、胎生と言われるものであると示されるのであるが、ここに疑の覆い、障りという意味が見られるのではないか。即ち、それは、外界に対して全く不明であり、閉鎖的、拘束的、暫定的、自己満足であるという意味である。このことは疑愛の語句に関しても見ることができ、即ち親鸞は「信巻」の菩提心釈を結ぶ文として『樂邦文類』を引用しているが、そこには、「浄土を論ずる者の常に多けれど、其の要を得て、直に指ふる者の或は寡し、未だ聞ず、自障自蔽を以て説を為すこと有る者、得に因て以て之を言ふ。夫れ自障は愛に若く莫し、自蔽は疑に若く莫し」と疑・愛について明しているのであるが、ここに疑の一つの性質である自ら浄土への正道を蔽い障碍するものであるという疑蓋の意味が明かされているものと思われる。かくして親鸞の意味した疑蓋は、自力心であり、又、その内容は、自ら浄土に対して蔽うという形態を示し、それ故、自我中心的な、閉鎖性、拘束性、自己満足、暫定性といわれる意味を示すものである。以上、親鸞の疑について、疑・疑蓋の語句を手懸りとしてその性質、性格についてみてきたのであるが、しかしながら、

疑を単に、我々の心のありさまであり、心的なものであるという把握の仕方だけで、親鸞の示した疑を十分明らかにしているのであろうか。我々が心に疑を抱くならば、それは我々の行為に何らかの変化をきたすのではなからうか。即ち或ることに對して、心に疑を持ては、それは我々の行為に様々に影響を与えるであろうと考えられる。このように考えるならば、疑は単に心的なものとして限定して考えることはできなくなり、疑は少なからず、何らかの行為として考えなければならぬ。このような意味において親鸞の中で注意されるのは、疑謗の語句であろうと思われる。親鸞はこの疑謗に「みだのちかひをうたがふものそしるものなり」と訓をつけているのである。即ち、疑謗ということとは、仏願を疑うということと同時に、謗るということの意味しているのであり、換言するならば、疑うという心的なことがらは、同時に謗るという行為をも意味しているということである。直接的に疑謗の意味を明らかにしているのは、『御消息集』第四、五通に引用されている善導の『法事讚』の文である。この第四、五通は同一日付の一具のものであるが、そこには、「五濁増の時に疑謗するもの多くして、道俗相嫌いて聞くことを用いず、修行するもの有るを見ては、瞋毒を起し、方便破壊して競いて怨を生ぜん」と示されている。このように五濁増の時代には、世のならいによってようあることとしていわなければなら

なかつたその直接的背景は、「詮ずるところは、そらごとをまふし、ひがごとにふれて、念仏のひとくにおほせられつけて、念仏をとどめんとするところの領家、地頭、名主の御はからひどものさふらふらんこと、よくよくあるべきことなり」といわれるように、領家等によって、ひがごとにふれ、念仏をとどめんとすることによる。即ち、ひがごととは、基本的には、殺盜といった範疇とは異なる、仏・菩薩・神祇冥道といった弥陀一仏以外の諸神諸仏・余行余善を輕悔し、否定しようとする行為であり、その故に、念仏者は、領家・地頭・名主によって念仏を停止されたのである。ここにおいて、疑謗とは、念仏者の諸神・諸仏・神祇等を輕んずるというひがごとによって、領家等によって念仏が停止されることをいうのであり、換言するならば「みだのちかひをうたがふものそしるものなり」とは念仏を実際的にとどめんとする行為に及んでまでいわれていると考えられる。このような疑謗の意味は、更に「高僧和讚」においてもみることができたり。即ち、先の『法事讚』の文に依拠して「五濁増のときいたり、疑謗のともがらおおくして、道俗ともにあいきらい、修するをみてあだをなす」といい、更に、「正像末和讚」にも「有情の邪見熾盛にて、聚棘棘刺のごとくなり、念仏の信者を疑謗して破壊瞋毒さかりなり」とか「五濁の時機にいたりては、道俗ともにあらそひて、念仏信するひとをみて疑謗

破滅さかりなり」と明され、又『皇太子聖徳奉讃』においては、「如来の遺教を疑謗し、方便破壊せむものは、弓削の守屋とおもふべし、したしみちかづくことなかれ」と述べられているのである。ここにおいて、疑謗は、五濁の世にことに多くなるものであり、道俗ともにあい嫌い、又仏道を修するものに対して仇をなし、更に、念仏の信者、如来の遺教を破壊し、破滅へ導くものとして把えられている。それは師法然とともに親鸞の生きた現実が示すように、念仏への弾圧であったのであり、この念仏弾圧が疑謗としてとらえられていたと考えられる。即ち、疑謗とは五濁の末法の世に、事実として展開する現実であり、自ら体験する眼前にくりひろげられる念仏禁止という行為であったのである。このように考えるならば、疑というものは、単に、不了仏智、ふたごころ、という心的様相を示すものではなく、謗（そしるもの）ということにより、念仏者を破滅させ、教法を破滅する行為であるということが出来ると思われる。そしてそれはとりもなおさず、報土往生の因としての信心の積極的な否定を示すものであるとみることができると思われる。それ故、親鸞においては、仏智・本願・浄土を疑うということは、たとえ一念も許容することのできないものであり、信疑は明確に決判されなければならぬものであったといわなければならぬのである。

（本願寺派宗学院研究員）

親鸞における疑謗について（川添）

掲載されなかった諸氏の発表題目（七）

鈴木大拙博士の般若思想観 和田真二（大谷大出身）
 古代仏教と出家性について 兼子恵順（四天王寺国際仏教大）
 文保本太子伝にみられる神祇思想について 今堀太逸（仏教大）
 聖岡教学における業事成弁について 服部淳一（大正大総合仏教研究所）
 「教行信証」における如来の表現と特徴 五十嵐明宝（大東文化大）
 法華一乗からみた歎異抄の解釈 植野光悟（地方公務員）
 親鸞に於ける偽の觀念 藤沢正徳（本願寺派宗学院）
 真実行 延塚知道（大谷大）
 称名破満 小林昭英（龍谷大）
 真宗における「行」について 堤玄立（龍谷大）
 称名思想の系譜 畝部俊英（同朋大）
 浄土の機 大城邦義（大谷大）
 親鸞の主体思想 安富信哉（大谷大）
 真宗に於ける真假論 徳永大信（佐賀龍谷短大）
 親鸞の聖人における往生と成仏 松野純孝（鶴見大）
 親鸞の名号本尊再考 清岡隆文（本願寺派宗学院）
 真宗教団史の起点 毛利悠（龍谷大）
 西田哲学における浄土真宗の世界観 幸城勇猛（龍谷大）
 日蓮聖人の即信成仏論の一考察 西片元證（立正大大学院）
 本門思想の立脚点 慶林日隆の所説を中心として 芹沢一男（立正大大学院）
 日蓮教学における顕本論の意義 北川前肇（立正大）
 日蓮日興の祖師教学継承について 本間裕史（立正大日蓮教学研究所）